

## セル成型苗の深植え定植による キャベツ結球部の傾き抑制

近年、需要が高まっている加工・業務用キャベツでは、省力、低コスト化を目指して機械化一貫体系の構築が求められており、その核となる機械収穫では、結球部の傾きが機械作業性を低下させる重要な課題となっています。また、傾きが大きい場合には中耕・培土・追肥といった機械による他の管理作業の弊害にもなりかねません。そのため、結球部の傾きを制御する技術として、育種や育苗技術に加え、より直接制御可能な栽培技術の開発が求められています。そこで、東北農業研究センターでは定植時のセル成型苗の植付け深さに注目し、キャベツ結球重を低下させずに結球の傾きを軽減する方法を開発しましたので、その概要を紹介します。

### ☆ 技術の概要

1. キャベツセル成型苗を深く定植することで、標準植えおよび浅植え（図1）に比べ、収穫期における結球部の傾きを軽微な範囲（垂直方向から0-20°程度）に抑えることができます（図2）。
2. 結球部の傾きに関与する項目として、軸（地際から結球部下までの茎部分）は深く定植した場合に短く、長さ当たりの重さが大きくなる傾向がみられましたが、有意な差は認められませんでした。また、植付け深さが深くなると、地表から深さ5-10cmにおける細根（径0-1mm）および太い根（径1-5mm）が相対的によく発達する傾向があります。
3. 地表面から2cm程度であれば、深く定植しても収量に差は認められません。

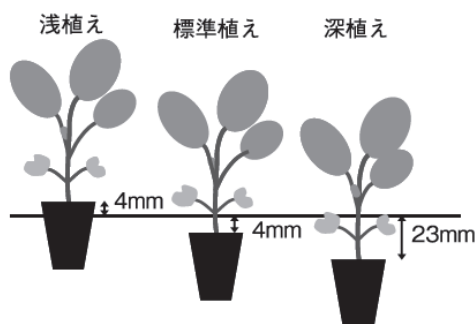


図1 キャベツセル成型苗の定植深さ

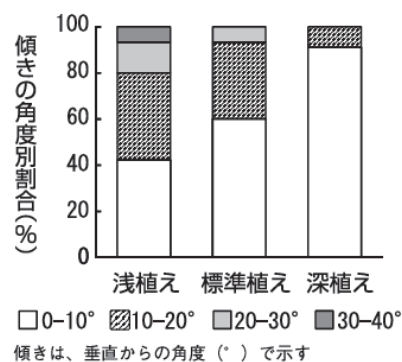


図2 キャベツ結球部の傾き

### ☆ 活用面での留意点

1. 成果は、キャベツ品種「おきな」および「彩音」を用いて宮城県岩沼市内の砂地圃場（砂壌土）で夏秋期（播種7/17、定植8/18）に行った栽培で得られたものです。
2. 128穴セルトレイで育苗し、「おきな」は4.4葉期、草丈10.9cm、「彩音」は3.3葉期、草丈10.8cmで半自動移植機を用いて定植しましたが、2cm程度の植付け深さであれば生長点部分が覆土されることはほとんどありません。
3. 詳しいことは、東北農業研究センター畑作園芸研究領域（TEL:019-641-7136）へお問い合わせください。（日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏）